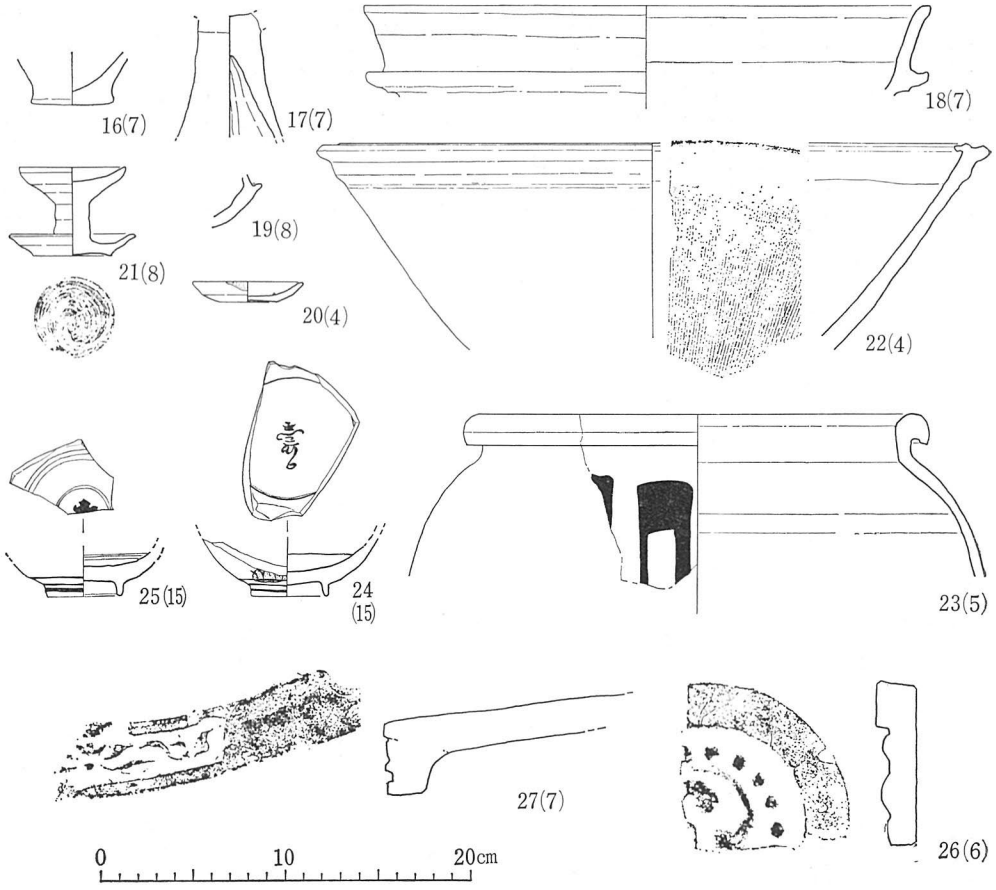


第７図　身狭桃花鳥坂上陵の出土品(2)（1/4）

瀬戸・美濃系の製品であろう。

磁器（第７図24・25）

碗や皿など二〇点余り出土している。そのほとんどは肥前産の染付である。図示しえたものは、いずれも碗である。24は見込みに「壽」を配した厚手の染付の製品。高台畳付の部分は無釉である。外面には草花文が描かれている。25は、見込み蛇ノ目釉ハギを行い、その内部にコンニャク印判の五弁花が認められる。

瓦（第７図26・27）

三〇点以上、出土している。付近に人家の多い第４トレンチからの出土量が多い。いずれも黒く燻した近世以降のものである。軒丸瓦（26）は、中心に巴文を置き、まわりに珠文を配したものである。径は約一六センチに復元できる。27は、形態上、軒平瓦・軒桟瓦の区別ができないものである。大振りの唐草文を瓦当面としている。

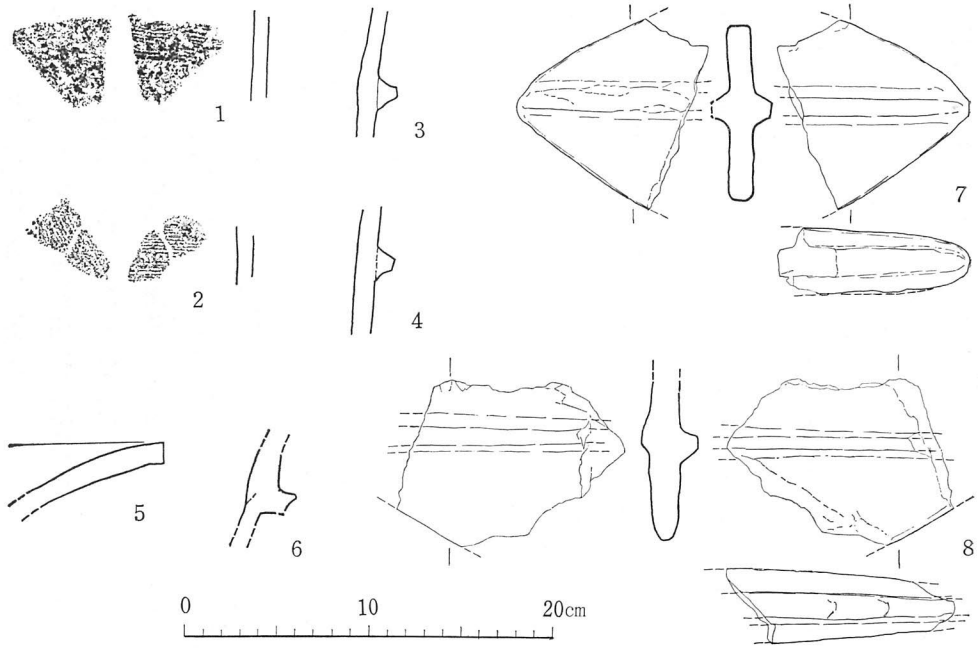
（土生田純之・福尾正彦）

昭和四十五年度　身狭桃花鳥坂上陵整備工事に伴う事前調査

宣化天皇の身狭桃花鳥坂上陵は、一大群集墳である橿原市新沢千塚古墳群の一角にある全長一三八メートルの

前方後円墳で、クビレ部の両側に造出しを設け、周濠を繞らす。現在の外堤は、後世の厚い盛土によって築かれた部分のあることが確かめられている（本誌二九号）。本陵の南方約四〇〇メートルに、倭彦命の身狭桃花鳥坂墓がある。墓域を前方後円状に画し、その前方部分には「夜泣塚」とよばれる細長い小丘があり、後円部分に我国最大の方墳がある。その墳丘は、一辺約八五～九五メートル、二段築成（西辺から南辺にかけて裾近くに三段築成を疑わせる緩斜面がある）で、テラスには、埴輪列を繞らす。埴輪円筒・朝顔形埴輪・形象埴輪の破片が九四片採集されており、その全てが埴質である。円筒は、器肉の薄手のものが大部分で、中に黒斑をもつものがある。大部分は表面が荒れて調整痕をとどめないが、第8図1・2の外面に横方向の刷毛目を認める。突帯は、低くなく、横に直線的に走るしっかりしたもの。胎土に、雲母・長石など細砂と赤褐色粒を多量に含む。同5は、朝顔形の口縁部。突帯の下段に横刷毛のある6は、朝顔形の花部の疑いがある。同7・8は、形象埴輪であろうが、器種不明。

宣化天皇陵の墳丘裾と外堤内法裾は、経年の波浪による浸蝕が著しいので、両所に恒久的な護岸工事が計画され、工事に先立って発掘調査が行なわれた。調査は、中村一郎陵墓調査官（当時、以下同じ）・石田茂輔陵墓調査室長・戸原純一同室員が、昭和四十五年十一月十六日から十八日間、第1図に示す墳丘裾の位置にトレンチ一〇本を設けて発掘した。トレンチは、概ね巾二メートル、長さ一・五～五メートル、ただ



第8図　身狭桃花鳥坂墓の採集品（1/4）

し、第5トレンチは、巾二メートル・長さ七メートルとして周湟を横断し、第6トレンチには、巾一・五メートル・長さ三・七メートルの拡張区を設けた。調査の結果、第2～6・8～10トレンチからは葺石状の礫群が検出された。この礫群は人為的に礫石を配したと考えられるもので、地山と思われる地層の上に、径二〇～三〇センチ程度の川原石を、三〇度前後の傾斜で葺いたものである。とくに、第2・5・6トレンチの礫群は、用材の礫を一部重複させるように置き、最下部の礫が直線的に並ぶ整ったもので、古墳の葺石の可能性が高い。しかし、これを築造当初の葺石と断定するには、なお考究すべき点も残されており、後世の護岸の施設の可能性もある。この整った礫群とは別に、各トレンチに、礫が散在して認められたが、これらは、もともと整った葺石の礫群であったものが、礫の多くが崩落して失なわれたものか、あるいは、墳丘上部から崩落してきた礫が現位置にとどまって湟の堆積とともに地中に埋もれたものであろう。

以上の調査結果に鑑み、墳丘裾の護岸工事は、浸蝕崖面近くに、地中浅く（ただし、第2トレンチ付近は現地表に捨てコンをした上に）梯子胴木を据え、この上に雑石を乱れ空積みにし、浸蝕部と裏込めに栗石と砂利を塡める工法によって遺構を保存することとし、翌四十六年度の秋から冬期に施工した。なお、調査中、東京国立博物館の三木文雄考古課長、関西大学の末永雅雄教授・網干善教講師の指導・助言を受け、同大学学生諸君の協力を得た。

各トレンチの概況は、次のとおりである。

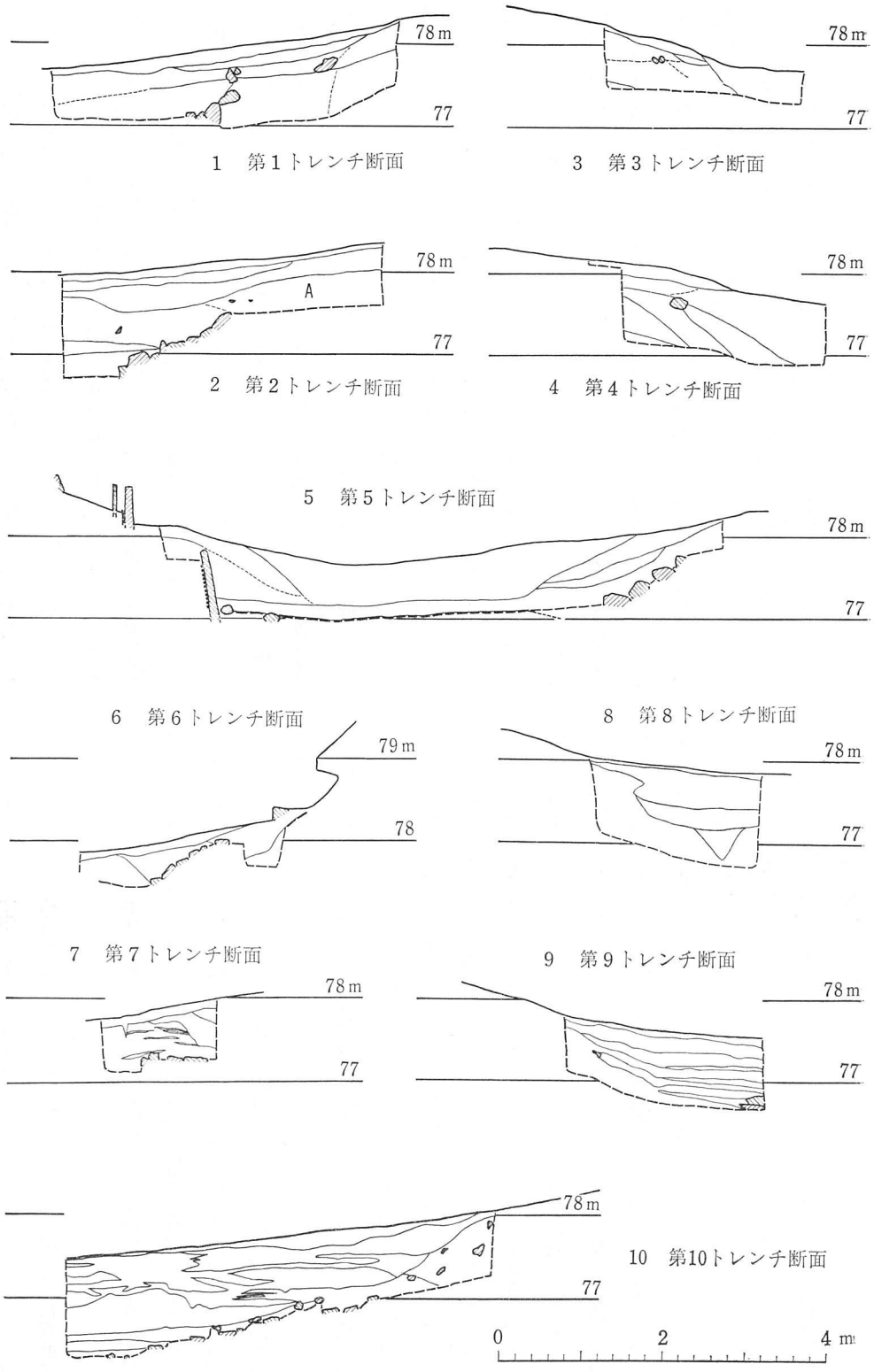
第1トレンチ（第9図1）　発掘床面まで堆積層で、その中に礫を少なからず含むが、礫は秩序をもったものではない。

第2トレンチ（図版四1、第9図2）　東側造出しの裾にトレンチを設けた。図のAを除いて発掘床面まで池沼堆積層で、このなかに腐蝕した有機物を多く含んだ層もあり、堆積層に覆われた葺石状の礫群がある。この礫群は、最も整ったもので、約三〇度の傾斜をもち、裾末端部は面が揃っている。原初の葺石である可能性が極めて高い。

第3トレンチ（第9図3）　発掘着手前の地表には礫が多数散布し、浸蝕された墳丘崖面にも礫が多数くわえこまれている場所にトレンチを設けた。比較的浅い部分から、礫が面をなして検出され、その傾斜は三〇度強を測る。この礫群の上と下とでは土の質が外見上同じ粘土層で、墳丘から浸み出す水で柔らかく、実測後、礫群とともに崩落した。トレンチの湟側にはヘドロが堆積しているが、その床面は掘削を受けているようにみえる。

第4トレンチ（第9図4）　第5トレンチとほぼ同様の葺石状の礫群が、有機物を含む粘土層に覆われ、細砂層の上面に据えられおり、礫の配置はやゝ疎雑である。細砂層の下には、風化した花崗岩の岩盤が認められる。礫群は、精査する前に崩壊。

第5トレンチ（図版五1、第9図5）　現在周湟が最も狭まくなった部分に周湟を横断するトレンチを設けた。約三〇度の傾斜をもつ整った



第9図　身狭桃花鳥坂上陵昭和45年度トレンチ断面（1/80）

葺石状の礫群が、砂混りの青灰色粘土層に覆われて出土した。礫群の裾末端部は礫が面を揃えて並び、直線をなす。湟の中は、青灰色粘土層の下に有機物を含む黒褐色の腐蝕土層が巾広く横たわり、原初の周湟堆積をうかがわせる。礫群は葺石らしいのであるが、この有機物層と礫群との層位関係は未確認で、この点で疑問を残す。礫群は調査中に崩落。

第6トレンチ（図版五2、第9図6）　非常によく整った葺石状の礫群が検出された。礫群の下は褐色（所々灰色）細砂層、この下に風化した花崗岩の岩盤がある。礫群の上は、多分堆積層と思われる灰色粘土層から灰色砂層に変わる地層とこの上に淡黄色の砂層が覆う。礫群は、他のトレンチのものと比較すると、法面が短く、裾末端のレベルが約〇・五メートル以上高い。これより下の部分が既に失われているのかも知れないが、末端の礫は曲線を描きながらも、一応面が揃えてあるようにみえ、本来の裾の形状を残していると考えることもできる。とくに、この位置が、後円部の真うしろに当り、丘尾を切断して周湟を設けた場所で、現状からも判断されるように湟底自体が高くなっていることを考えると、その可能性は十分にある。なお、葺石状の礫群の裾末端から約一メートル外側（湟側）に竹シガラ柵が出土し、その内側（墳丘側）にあたかも裏込めのような乱雑な礫群があった。

第7トレンチ（第6図7）　多少はらみ出し、散在する礫群が出土したが、葺石らしくない。礫群は、据えられた土とともに調査中に崩壊した。

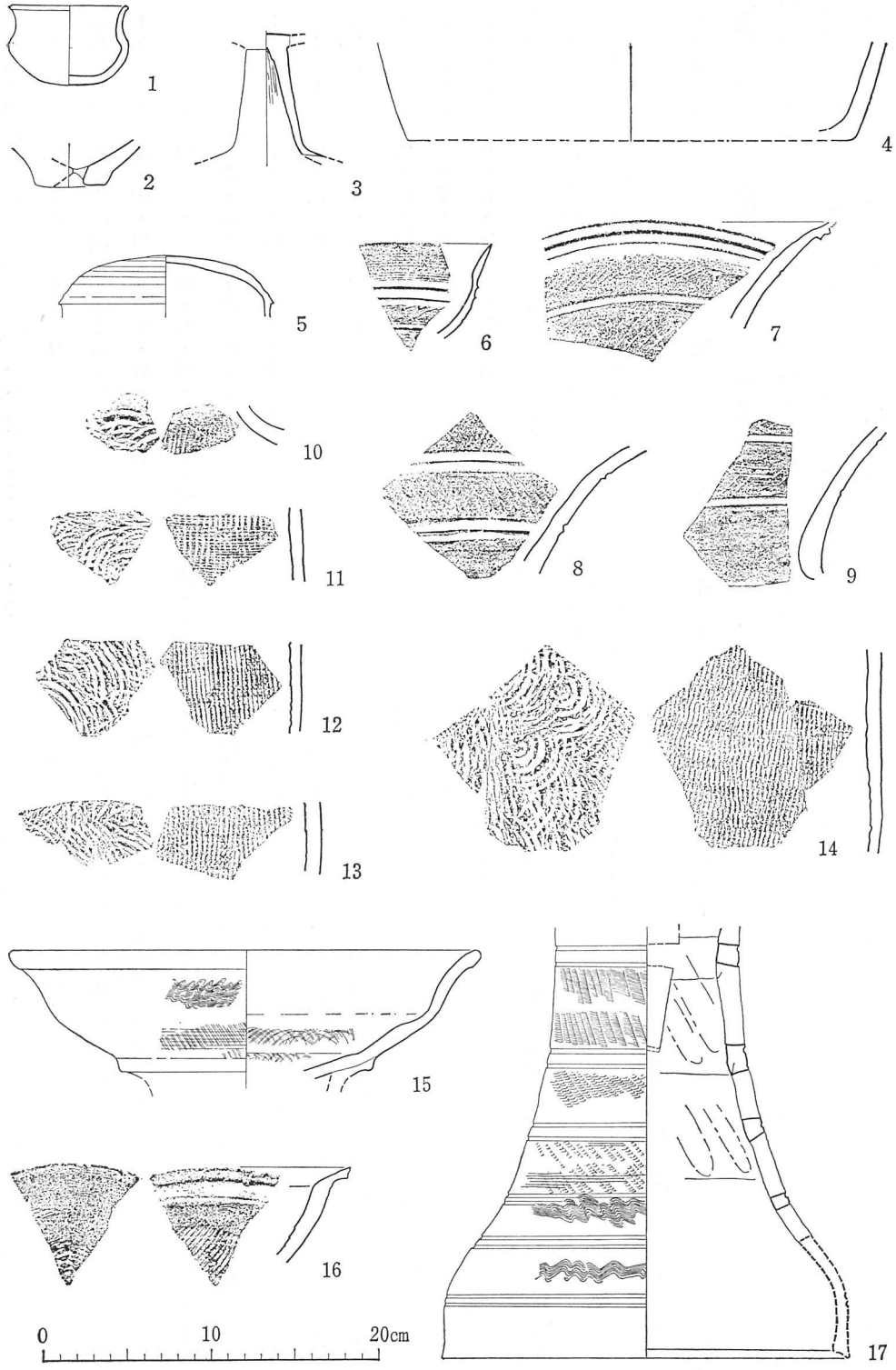
第8トレンチ（図版六1、第9図8）　比較的整った葺石状の礫群が、堆積土の下の粘質砂層の表層近くから検出されたが、精査前に崩落。

第9トレンチ（第9図9）　厚い池沼堆積層に覆われ、砂質粘土層の表層近くに据えられた礫群が検出されたが、精査する間もなく崩壊した。ここの堆積層は非常に明瞭で、砂層・粘土層が薄く積重なり、その下部には有機物を含む腐蝕土層がある。礫群は整ったもので、礫の間から壺形土器（第10図1）が出土した。

第10トレンチ（図版七1・2、第9図10）　ここからも葺石状の礫群が、厚い堆積土層の下から出土した。礫群は、墳丘側の上半部と湟側の下半部とで様相が異なる。上半部の礫群は、黄色砂質粘土層中に面をなしているが、やゝ疎らで、傾斜も約二三度とやゝ緩やかである。下半部の礫群は、密で、部分的に二・三個が重なったところもあるが、雑な配置で、傾斜は上半部よりも更に緩やかな約一五度。両者とも余り葺石らしさを感じさせない。下半部礫群の上の土は、細かく見ると薄い砂層と粘土層とが交互に積重なり、礫群は有機物を含む腐蝕土で覆われ、年代を経た池沼堆積層であることを明瞭に示している。

次に出土遺物について記す。

この事前調査によって採集された遺物は、計四五七片である。その主体をなすのは、四一七片の埴輪で、ほかに須恵器二三片、土師器（弥生式土器）八片、瓦器一片などがある。



第10図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(1)（1/4）

なお、ここでは、昭和四十三年に墳丘裾で表面採集された一四片の遺物のうち一片をも加えてある（第11図21）。

図示した遺物の出土位置は、次のとおりである。

1トレンチ　4・10・44・46・50・51・53・54

2トレンチ　11～15・17～19・23・25・26・29・35・37・39・～41・45・49・55・57～59・67～69

3トレンチ　5・28・33・36・42・48・60

4トレンチ　22・31・38

6トレンチ　43・47・61・63～66

8トレンチ　20・30・56

9トレンチ　1・7・9・62

10トレンチ　2・3・16・32・70・71

以上は、各トレンチの葺石状の礫群上面及びこの上の堆積土中から出土している。ただし、第10トレンチ出土の2は、葺石状の礫群の下から出土し、このほか、墳丘裾の地表面に散在したものは、次のとおりである。

A地点　24　　B地点　52　　C地点　6・8

出土品の大部分は、山内にあったものが崩落したものであろう。造出しに設けた第2トレンチからは、多くの埴輪片のほか、須恵器片が少なからず出土して注目される。第3トレンチからは、同一個体と判断される破片が多数あって、このうち接合するものは48となる。なお、第5トレンチからは、出土品がなく、第7トレンチからは、図示できるような良好な資料に恵まれなかった。

土師器（弥生式土器）（第10図1～3）

器形の知られるものは、次の三点である。

壺形土器　1は、小型のミニチュアを思わせる完形品。全体に扁平な形状で、短い肩部に外反する口縁部がつき、端部は丸く終る。口縁部と肩部の区別が曖昧で、内外両面を横撫でし、底部も丸い。

甑形土器　2は、鉢状の腰底部で、平らな底部に斜の小孔を穿つ。

高坏形土器　3は、脚部で、筒部から屈曲して口縁部が広がる。口縁部は、別の粘土紐（帯）が用いられたらしく、剥離している。筒部内面に絞目がみえる。

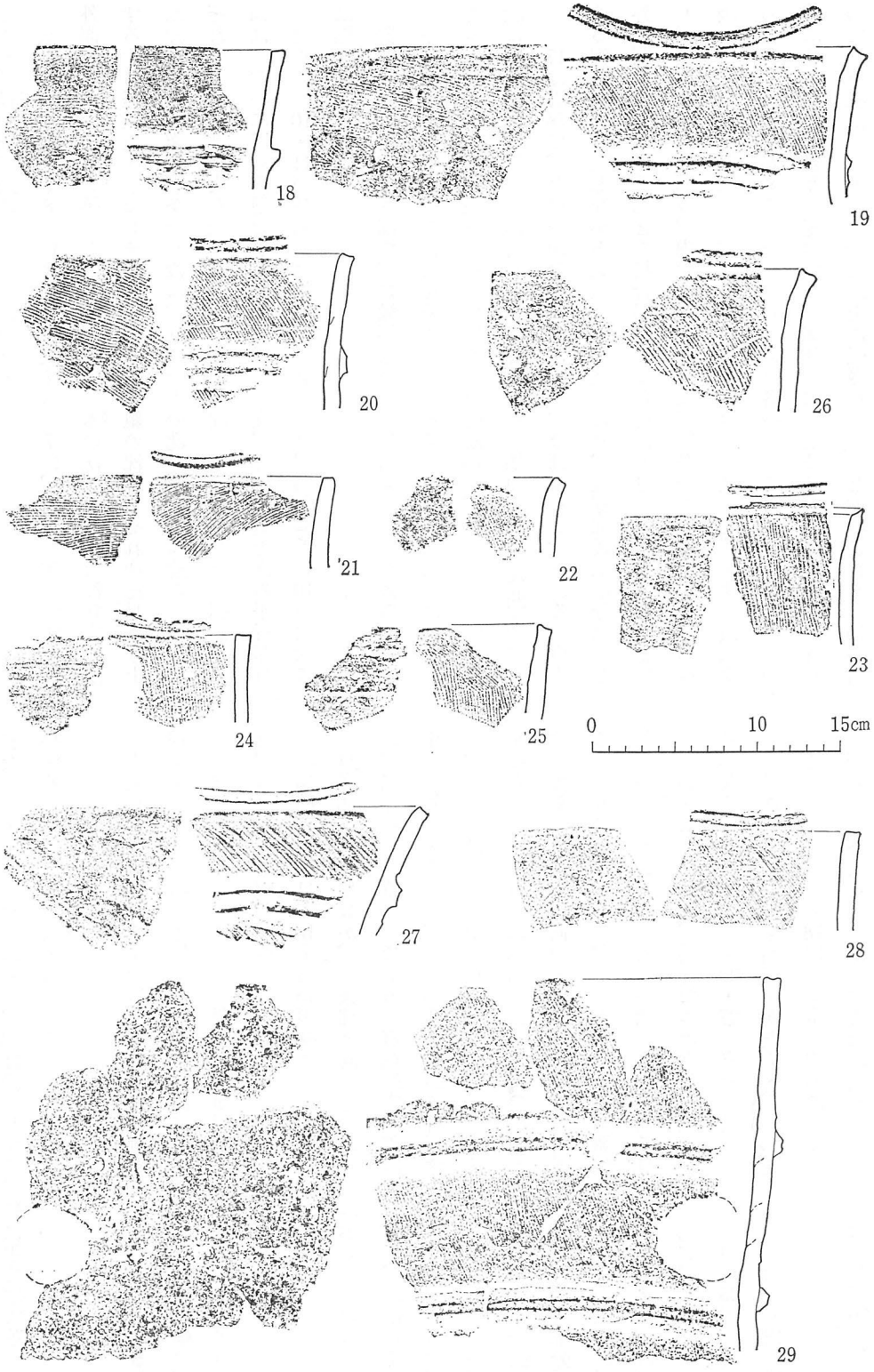
瓦器（第10図4）

甕形土器　4は、腰から底部にかけての小破片。器胎は灰白色、外面に煤が付着。

須恵器（図版八1、第10図5～14）

坏蓋　5は、口縁部がほぼ垂直に立つものと思われ、上面との境に鋭い稜をもつ。稜の上は横に撫で、その上部に篦削りを施し、頂部は丸い。

高坏　6は、高坏の坏部もしくは碗と思われる破片。口縁部は、外上方に直線的に開き、端部が鋭い。胴部は、口縁部と接して内面に弱い稜をもち、外面に断面三角形の突線が横走し、その下に櫛描き波状文を



第11図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(2)（1/4）

施こし、段を経て底に続く。口径一五・四センチ。

甕　口頸部7～8はいずれも外反する。7は、端部が尖り気味で、外面に二条の突帯を繞らし、その下には一本の沈線を挟んで波状文を配する。口径三三・〇センチ。8は、二本一組の沈線―それゆえ見かけ上断面三角形の突線一条を二段に、9は一本の沈線を二段に繞らし、それぞれの上部に波状文を配する。9は、7と同一個体らしい。胴部10～14は、内面に円形内型を当てた所謂青海波文、外面に縦方向の平行叩目が見える。10・11の外面には掻目が顕著であり、頸部に近い10の内面には撫でがみられる。

器台　15・16は受部で、口縁端部の下の外面に波状文を繞らし、その下に斜めの平行叩目と掻目を施こし、これに対応する内面には撫で消しきれなかった青海波文が残っている。口縁端部は、15が肥厚して突帯状になり、丸く終るのに対し、16は外に折れ、端面は垂直な凹面をなす。17は脚部で、全周の四分の一もないが、ほぼ全形が知られる。直立する裾部から内反しながら立上って筒状になり、残存部最上部分は少し外に開き気味で、受部との接合が近いことを推測させる。裾端部は肥厚し、端面は中央が凹み、内傾する。外面は、二条一組の沈線で七段に区画し、下から一段は無文、二～六段に櫛描きの波状文を繞らす。波状文の表現には差異がある。三段から上には各段ごとに方孔が穿たれ、縦一列に並ぶ。これと九〇度回転した部分の六・七段にも方孔が認められるので、方孔は、縦列となって四方に配されるものと推測される。15が精良な胎土・堅緻な焼成に対し、16は締りがなく、17は生焼けで茶褐色を呈する。16は口径一八・六センチ。

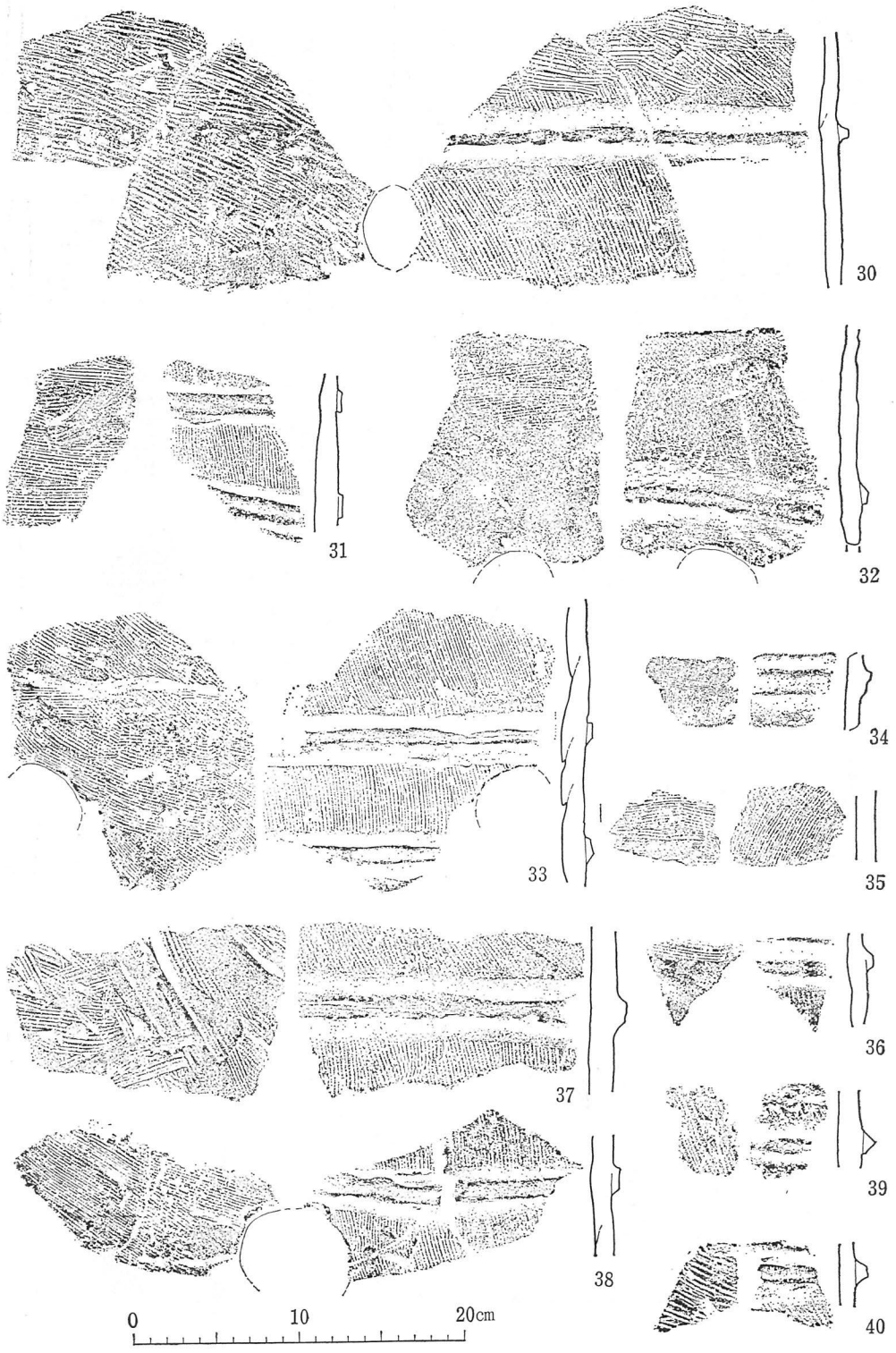
埴輪

表面が風化剥離して土師器とも埴輪とも判断しにくいものもあるが、採集されたなかに形象埴輪は一片も見出されず、本来、形象埴輪は、ほとんどなかったのであろう。明確に朝顔形埴輪とわかる六片をのぞくと、残りは全て埴輪円筒片である。

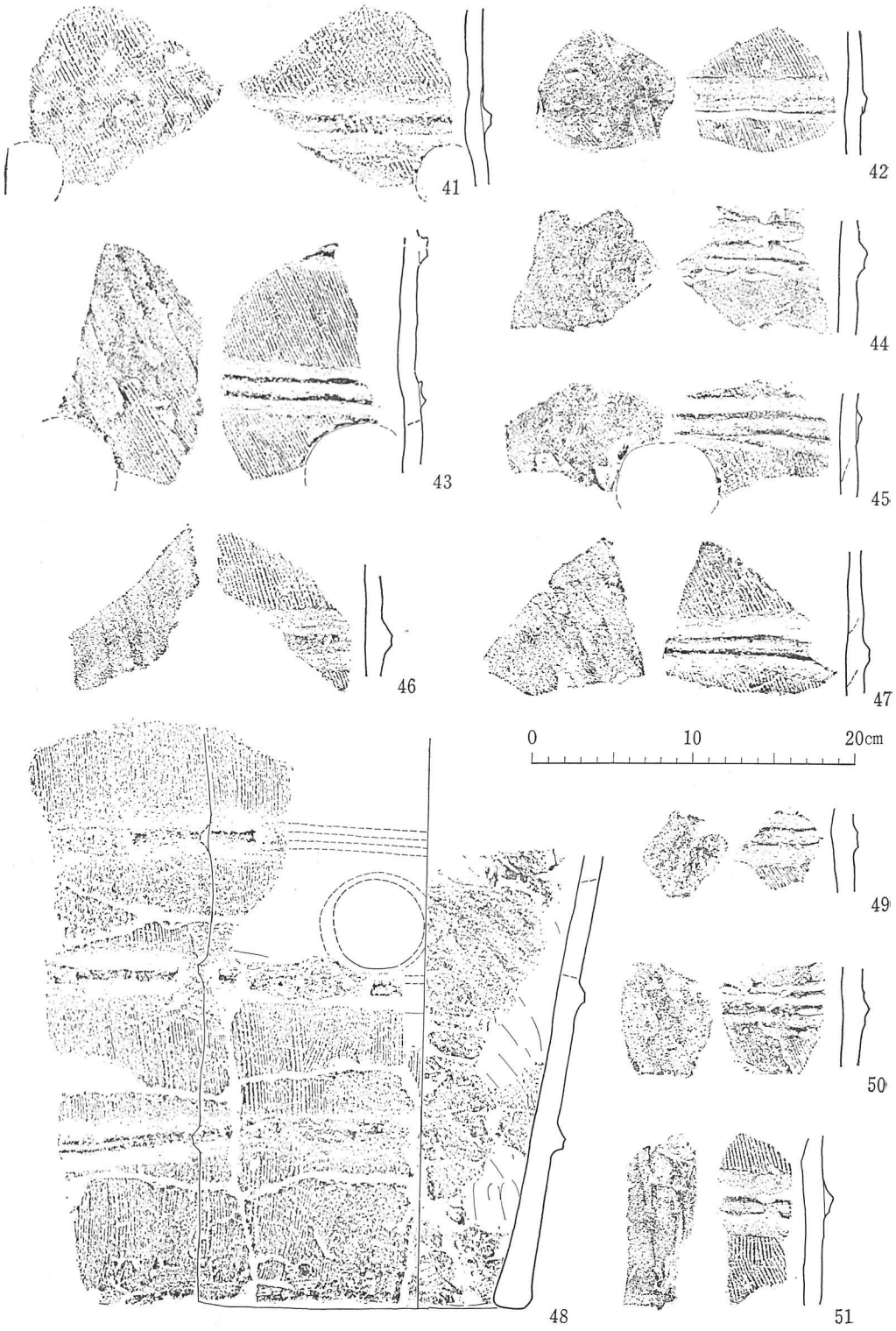
埴輪円筒（第11図18～第15図68）

口縁部　破片数が、基底部と同じく少なく、図示したもののほかには、二片を数えるだけである。直線的に端部に至るもの、端部近くでわずかに外反するもの、全体がゆるやかに外反するものとがある。端部は、横撫でによって中央が窪む平面に終り、外傾するものが多いが、水平のもの（18・21・24）、内傾するもの（23）もある。外面の調整は、すべて斜または縦方向の刷毛目いわゆる縦刷毛で、右下りが大部分である。まれに21のような左下りもある。外面調整におけるこの傾向は、胴部についてもいえる。内面の調整は、斜刷毛目（19・20）または横刷毛目（18・21）のもの、斜撫でつけと斜刷毛のもの（22）、刷毛による調整がなく、斜撫でつけ（23・27）または横撫でつけ（24・25）のまゝのものがあり、いずれも端部を横撫でする。横撫では、外面より内面に巾広く施こされ、特に18は、突帯部内面にまで達する。

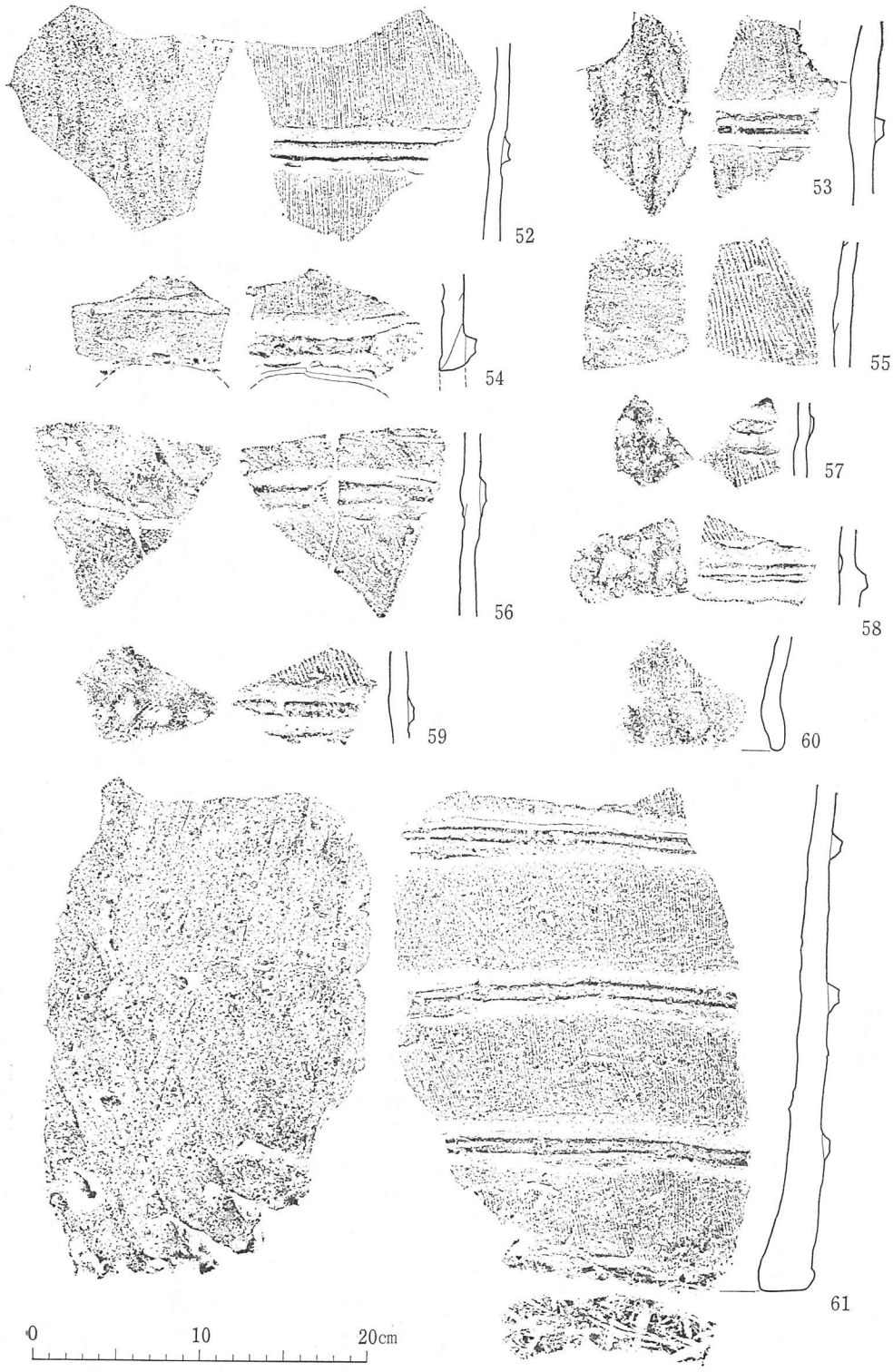
胴部　外面の調整は、斜または縦刷毛である。ただし、30のみは、



第12図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(3)（1/4）



第13図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(4)（1/4）



第14図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(5)（1/4）

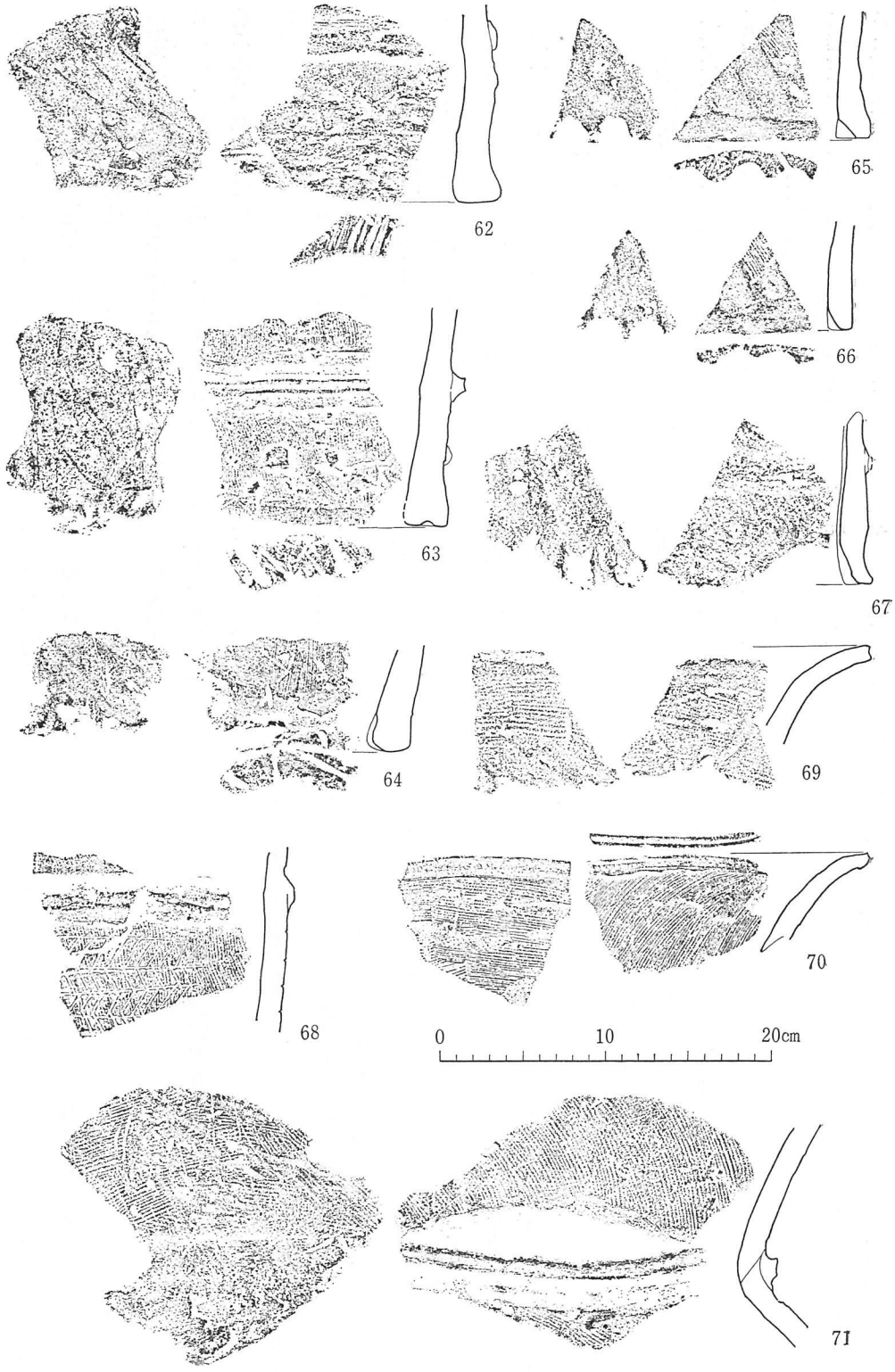
斜刷毛目の上に横刷毛目を加えたものであるが、横刷毛は、断続的であると同時に斜に方向を変えることがあり、特異な例である。内面の調整は、撫でつけのまゝのもの、その上に刷毛目を加えたもの、両者が併用されたものの三者がある。内面の調整を詳しくいうと、横刷毛目だけのもの（31）、横刷毛の後に斜刷毛を施こすもの（33）、横刷毛の前に縦刷毛（34）または斜撫でつけ（35・36）を施こすもの、全面に斜刷毛のみを認めるもの（38～41）、斜刷毛の前に斜撫でつけを認めるもの（42～45）、斜撫でつけのみを認めるもの（46～50・61）、縦撫でつけのみを認めるもの（51～53）、横撫でまたは撫でつけを施こすもの（54・55）等がある。破片の過半は、斜撫でつけのみのもので、斜刷毛及び斜撫でつけ後に斜刷毛を施こすものが次ぐ。これは破片のうえでの所見ではあるから、個体数をもって論じられないが、29・48・61などの大型の破片あるいは接合資料においても斜撫でつけのみが認められ、口縁部も撫でが少なくない点、いいかえれば、内面における刷毛目調整が少ない点は、注目されてよいであろう。また、胴部内面の調整が多様であることも一つの特長といえるかも知れない。なお、外面に突帯が繞る部分の内面には、指オサエの痕跡の明瞭なもの（57～59）がある。

胴部の成形は、いうまでもなく、粘土紐を積上げながら指でおさえて下の粘土と接合したものである（29・30・33・38・45・47・54～56）。成形は、よくいわれるように段階を区切って行なわれたことは、61の内外両面の調整痕がよく示している。すなわち、外面に施こす二回目の刷毛目の発端が、突帯一段と二段の間にほぼ一直線に並び、内面でもこれに対応するように二回目の横撫での発端がほぼ直線上に並ぶ。こうした目で見直すと、33もこの成形の段階を示し、内面の横刷毛は、次の段階に積上げる粘土紐の接合の馴染みをよくする工夫であろう。

突帯は、刷毛目調整の後の胴部に、粘土紐を指ではさんで器壁に押しつけて貼付け、その粘土紐の上下の側面と頂部を横に強く撫でつける。通例と同じ手法であるが、全体に小ぶりで、断面が等脚台形かこれに近いものは、余り突出せず、巾も少し狭く、断面が不正台形のものは、一方の脚が短かく、三角形に近い台形を示し（34・39・42・50・51）、また低平なものが少なくない（19・31・33・43・45）。走行は、蛇行し、他の突帯・底部や口縁端面と平行しないことが多い。横撫では十分でなく、指おさえの痕跡を残し、上下側面に粘土紐の一部が甲張り状に存し、接合面に空隙が認められる破片が多い。突帯の数は、全形の窺える資料がないので不明であるが、48・61に三条繞らされているから、これ以上の数であったろう。

透孔は、突帯の横撫での後、篦状の工具で穿たれ、切削した面を指で押えるか撫でる（38・43）。円形を呈するが、不整な形が多く、とくに54はいびつである。透孔の位置と数については、全形の窺える資料がないので、不明であるが、口縁部と基底部に穿たれた例は見当らない。

いわゆる基部として明確なものは見出されない。61では、粘土紐を螺旋状に三段積上げた急傾斜の接合痕が認められる。基底部には、内面・



第15図　身狭桃花鳥坂上陵の昭和45年度出土品(8)（1/4）

外面に引きのばした粘土板を貼付けた痕跡が窺えるものがあり、62は、焼成前（たぶん自重で基底部が縮んだ折）に外表面が接合面から剥離している。器面の調整は、外面が斜または縦方向の刷毛目、内面が斜方向の撫でである。基底部の下端部は、製作の過程で自重のため変形するところから、48・61では、内外に張出した粘土を指ではさんだ痕跡が部分的に遺り、65～67では、内面を指で強くおさえ、外面を横撫でつけている。

灰褐色・黄褐色・赤褐色または茶褐色の埴質のものが全体の七割を占め、赤褐色ないし茶褐色の硬質のもの二割弱、須恵質のものが一割強を数える。破片全体が一様に埴質あるいは硬質のものが多いが、一片の中が質の異なる焼成を示すものも少なくない。たとえば、硬質の部分と須恵質の部分とが混在したり、器肉の芯の部分は灰色の須恵質であるが内外面は褐色系の硬質のものなどである。

68は、埴輪円筒片に、先の鋭った工具で綾杉文を刻む。

朝顔形埴輪（第16図69～71）

朝顔形埴輪と確認できるものは、わずかに口頸部八片で、全形は明らかでない。69・70は、大きく外反する口縁部で、外面は斜刷毛、内面は斜撫でつけの上に横刷毛を施こし、端部を横撫でする。71は、肩から頸部の破片で、外面は斜刷毛の後、頸根部に突帯を繞らし、内面は、肩部に撫で、頸部に一部乱れた斜刷毛を施こす。これらの断面の曲率からすると、肩は余り張らず、口縁部と頸部との境は、突帯が繞るのであろうが、曲率を極端に変えるものではなさそうである。円筒と同じく、埴質が多いが、70一片のみは、硬質ないし須恵質である。

（笠野　毅）

山辺道上陵鳥居改修工事箇所調査

景行天皇山辺道上陵の鳥居老朽による建替え工事に伴い、昭和六十三年十一月二十二日から平成元年三月一日まで立会調査を実施した。

掘削は在来鳥居の基礎と同一箇所（第16図）を各々一・五メートル四方で、一・六メートルの深さまで行った。基礎内の土相は現地表下〇・六メートルまでが黄褐色の砂質粘土層、それ以下が青灰色粘土層であった。掘削が進むに従い現地表下約一五センチから在来鳥居の胴木、五〇センチから旧鳥居の胴木があらわれ、さらに掘削床面から在来及び旧鳥居の礎石が検出された。これらのことから、基礎内の二層は在来鳥居建込みの際の基礎埋め戻し土とみられ、工事に支障はないので、予定どおり施工した。なお、北側基礎の上げ土中より土師器片一、土師質土器片一、陶器片一を採集したので、次に述べる。

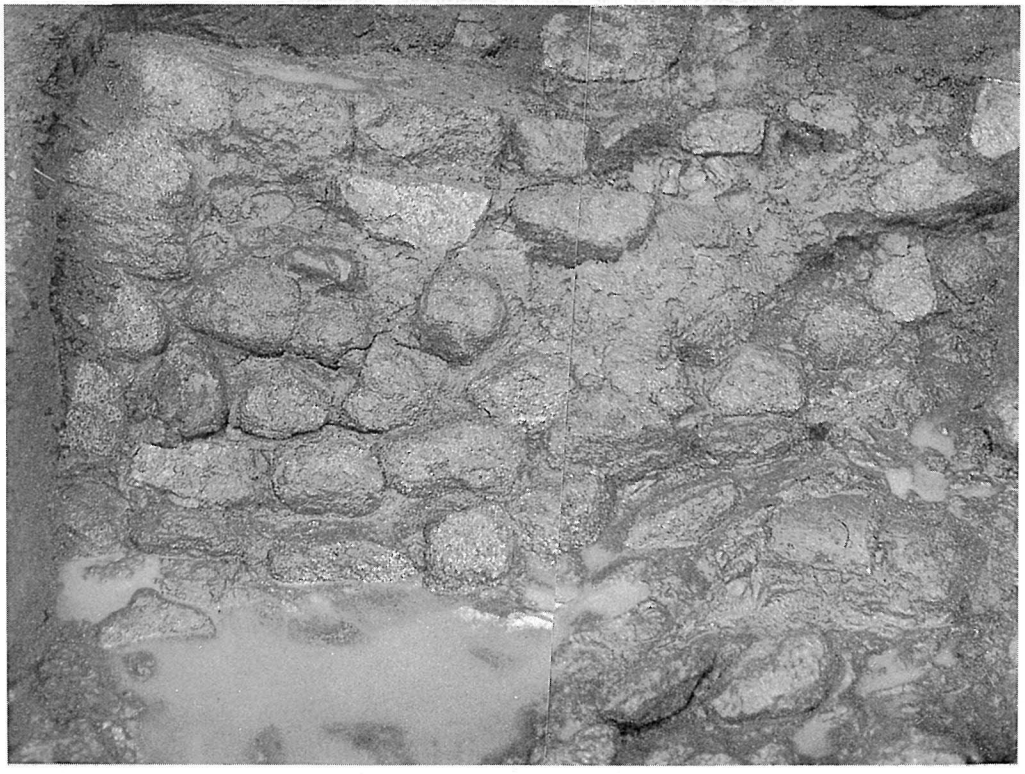
（池谷浩行・北田和夫）

土師器（第17図1）

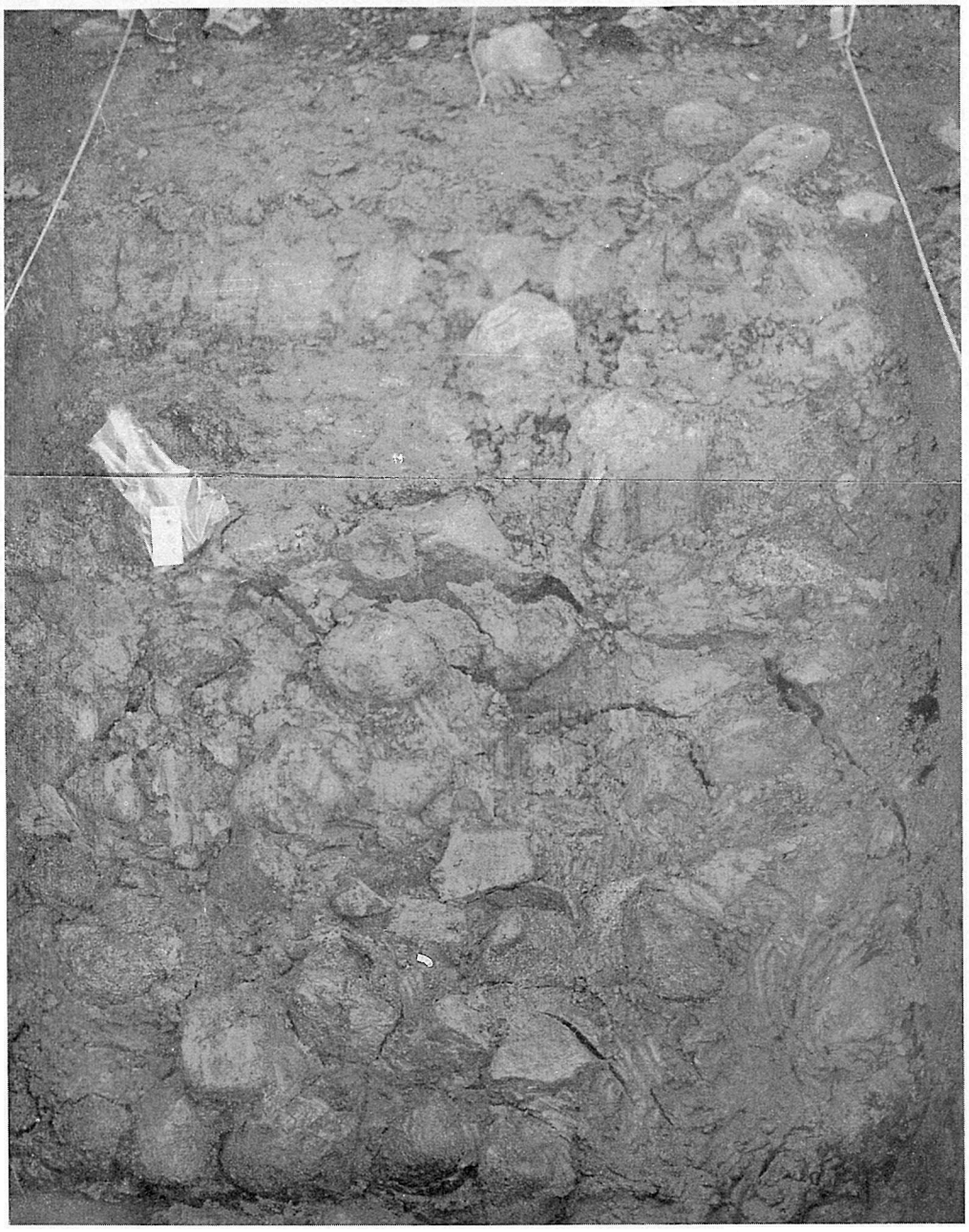
坩と思われる。胴部の膨らみは弱く、頸部もあまり大きく開かない様である。全体に風化がひどく、調整痕は全く残っていない。

1．身狭桃花鳥坂上陵　第２トレンチ　葺石状礫群

1．身狭桃花鳥坂上陵　第５トレンチ　葺石状礫群



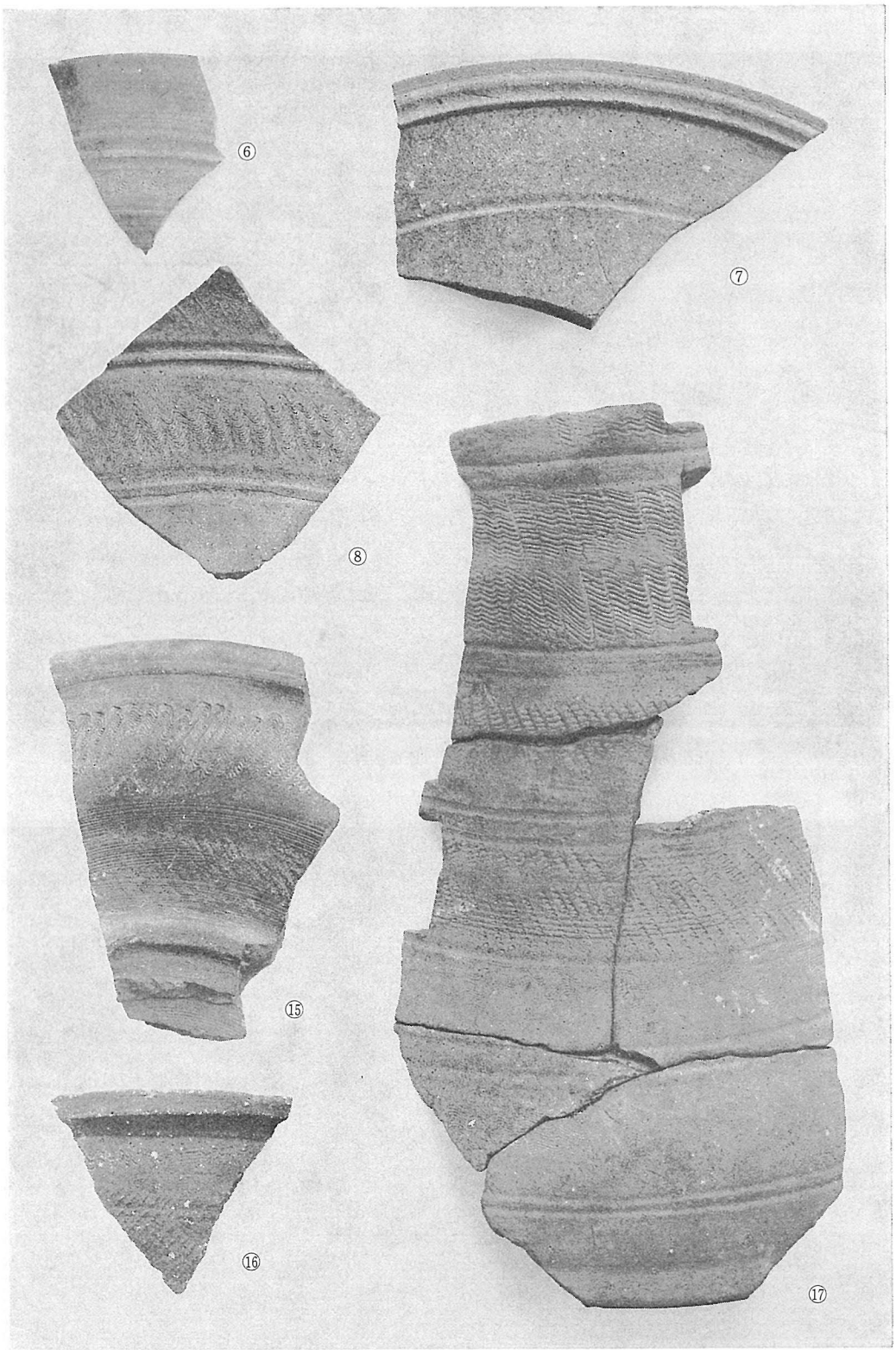
2，身狭桃花鳥坂上陵　第６トレンチ　葺石状礫群



1．身狭桃花鳥坂上陵　第８トレンチ　葺石状礫群

1．身狭桃花鳥坂上陵　第10トレンチ　葺石状礫群　上半部及び下半部上部

2．身狭桃花鳥坂上陵　第10トレンチ　葺石状礫群　下半部



1．身狭桃花鳥坂上陵　出土品（須恵器）